



何がめでたいことか

本願寺派 布教使 藤澤 量正

ところで私たちは、新年を迎えるところで「おめでとう」と祝詞を交わします。苦悩の尽きることはない人生に在つて、何が本当にめでたいことなのか、それを考えてみることも大事なことであろうと思うのです。

本来「めでたい」ということばは、物事が望ましい状態に在るとき用いられます。したがって、喜んだり、祝うに値すると思われるときに使用されるもので、悲しみや苦しみを抱いている人などには、このことばを用いないのが常識です。然るに親鸞聖人は、明法房が往生の本意をとげたとの知らせを受けたそのご返事には、「めでたきことにて候へ」と述べておられます。また、ひらつかの入道という者が往生したと聞かれたときも、「めでた

さ申しつくすべく候はず」と書いておられるのです。これは、一般の常識と異なつて、往生こそ「めでたきこと」と語られたのであります。

さらに聖人は、『御消息』のなかで、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ

と述べられて、何よりも南無阿弥陀仏に遇うことこそが「めでたいこと」とされたのです。したがって、お念仏を申すことについても、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなりと述べられて、めでたい人生とは、お念仏を申し、浄土に往生する身になることであると明らかにされたのです。この「めでたい」ということばは、「芽出たい」と書く場合が多いようですが、この「芽」という字は、くさかんむりに「牙」という字であります。これは、

牙のような芽のすがたを型どつて、内に力をいつぱいたぎらせ、これから大きく伸びようとしている生命の躍動を象徴しているのだとも言われています。「芽が出た」とか「芽出たい」と書くのは、喜びの芽生えを意味するものであるとするなら、お念仏が申さるる身になるということとは、芽の出る人生を持つということなのであります。（中略）

このたび私は、喉頭腫瘍によって声帯を切除し、遂に声を失いました。声に出してお念仏を相續することのできない悲しさとさびしさは拭うべくもありません。しかし、南無阿弥陀仏の大きなはたらきに遇わせていただいて、悲しみを超える力と、安らぎを得る道が何であるかを改めて思い知らされました。

私たちは、新しい年を迎えて、いつでも、どこでも、どんなときでも、つねに如来に喚びつづけられていることに思いを至し、芽の出るたしかかな人生を持ちたいものです。

『人間として』（本願寺津村別院）より引用
一部を中略してご紹介しています



「死」について

仏教学者 中村 元

生と死は裏腹のものです。つまり、生まれたということは同時に死ぬことをそこに内含しています。そして

また、死ぬということは生きていることをそこに含んでいる。死を問題にするときには、生きているわけですからね。瞬間、瞬間に、人が生き、また死んでいる。ですから、瞬間、瞬間に、人は生と死の両面に迫られているわけです。

ただ、人が死んだときに、第三者は、その人の生と死を客観的に見ることができません。外側から見ると、その人の生は死によって完結します。ですから「人の評価は棺を覆うて初めて解る」というようなことを申します。しかし、今ここで論議している私なら私という人間自身は、自分の生が死と裏腹だと

いうこと、裏には死が迫っているということを知りながらも、なかなか死を客観的なものとして評価することができないわけです。

死んだらどうなるのかということは、昔から哲学や宗教で論じられています。死んだという経験をもってこの世に戻って告げてくれた人はひとりもいません。死んで、すべてが消えるということも考えられますが、消えると断定する確実な根拠はなにもない。というのは、私どもがめいめい生きているということが、そもそもひとつの不思議だからです。なぜ生まれてきて、なぜいのちが続いているのか、誰も説明できないのです。

(中略) 死はどこまでもその人個人の事柄ですが、では、亡くなった人のために追善法要をするということはどうなのか。お葬式がそうですね。この頃は、お葬式というと仏教の専売特許みたいになつていますが、原始仏典を見ます

と、「お葬式などをやってなんの意味があるのか」というようなことを言っています。お葬式というのはバラモン教がやっていたのです。人が死んだからというので嘆き悲しみ、いろいろ儀式を行なうけれども、死んだ人はもう死んでしまったものだ。そのために儀式を行なうというのは、まるで池の中に石を投げ込むようなものだと言うわけです。その石が上がつてくれるようにいくら祈願しても、石は上がつてこない。それと同じように、死んだ人のために儀式をしたり祈つたりするのは無意味だと言うのです。

論理から言うとしたしかにそうなると思います。ただ、死んで法要をしたり、人が集まって儀式を行なうのは、その人を愛し尊んで、そのゆかりを尊重するということでもありますね。それは同時に、生きている人にとって大きな意味をもつ。ですから、そういう意味での葬儀なり追悼会などには意味があると、思います。

『人生を考える』(青土社)より引用

一部を中略してご紹介しています



衝撃

龍谷大学 名誉教授 石田 慶和

幼いころに心に受けた大きな

衝撃は、その人の人格形成に深い影
響を与えます。今度の阪神大震災

は、子供たちの心にどれほどの衝撃
を与えたことでしょうか。テレビのア

ナウンサーが、廃墟になった神戸の
町を「パーママー」と呼んでさまよう

ていた少年の姿が眼に焼き付いてい
ると言っていました。一瞬に両親を

亡くしてしまった少年の悲しみを癒
すものが果たしてあるのでしょうか。

地震や災害でなくても、子供た
ちの心に傷を残すことは、いくらで

もあります。可愛がってもらったお
じいちゃんやおばあちゃんが亡くな

るとか、小さい妹や弟が死んでしま
うとか、身近なものの不幸は、大

人たちの考える以上に子供たちに
衝撃を与えます。それまでの和や

かな毎日の生活中に、突然襲ってきた
理不尽な暴力―「生死無常」は子供

たちにはそうとしか思えないでしょう。
しかしそれは、人生の実相に気付く

大きなきっかけでもあります。すぐに
はそのことは理解できなくても、その

時に感じた悲しみは、心の底深くに沈
みこんでゆき、そしてそこから宗教的

な目覚めへとつながってゆくでしょう。
(中略) このままではいけないんじや

ないか、なにか大事なことがあるんじや
ないか、そうした思いが若い人をつきう

ごかすのは、幼いころから心の中にしま
いこまれていた、人生についての、生き

ていることについての疑問です。それな
しには、人は宗教的世界へ入れないの

ではないでしょうか。
子供たちを厳しい現実から守ってやり

たい、なるべくつらいことや悲しいこと
に会わせたくない、というのは、おと

なたちの共通の思いです。しかし、時

として襲いかかる「生死無常」の事実
はどうしようもありません。そのとき、しつ

かり子供たちをだきしめてやると同時
に、どんなに悲しくてもその事実直面

して乗り越えてゆく勇気を教えてやら
なければなりません。そうするため

は、まず私たち自身が本当に宗教的世
界に目覚めていなければならぬと思いま

す。
「天国はもう秋ですか、お父さん」

誰が言ったのか知りませんが、どこか
で読んだこの短い少年の言葉の中に、ど

れほど深い思いがこめられていること
でしょう。愛するお父さんを交通事故で

突然亡くした少年が、天国にいるお父
さんに呼びかけているのでしょうか。哀

切きわまりないこの言葉の中に、なにか
深い宗教的なものが含まれているように

も思えます。それが限りない慈悲の仏
さまへの思慕となつたとき、そこにひとつ

の宗教的な目覚めが実現するでしょう。

『念仏の信心』（本願寺出版社）より引用

一部を中略してご紹介しています



花まつり

中央仏教学院 元講師 黒田 覚忍

お釈迦さまは、いまから二千五百年ほど前の四月八日、インドのルンビニーの花園でお生まれになったと言われています。やがてお釈迦さまは、私たちに戦争のない平和なところがほんとうに大切であることを教えてくださったのです。

世界のあちこちで、いまも戦争が起こつています。戦争で亡くなったり、けがをして苦しんでいる子どもたちもたくさんいます。お釈迦さまのお誕生をお祝いし、お釈迦さまの教えを聞きましょう。

お釈迦さまがふるさとの近くの林においでになった、あるときのことです。釈迦族とコーリヤ族との間で水争いが起こりました。釈迦族の国とコーリヤ族の国との間に、ローヒーニー河が流れています。二つの国は、

その河から田畑に水を引いていました。

ところが夏のこと、日照りが続いて水不足になり、作物が萎れ始めました。このままほつておけば、田畑の作物は枯れてしまいます。農家の人たちは、水の少なくなった河の両岸に集まって、それぞれ相談しました。そのうちにコーリヤ族の男たちが、河の水を全部自分たちの方へ引こうとしました。釈迦族の男たちは、だまって見ているわけにいきません。こうして殴り合いが始まり、大乱闘になりました。やがて、それが戦争にまでなりかけました。

その様子をご覧になっていたお釈迦さまは、たいへん心配されました。そこで空中を飛んで、ローヒーニー河の上空に姿を現されました。

どちらの側も、お釈迦さまの姿を仰ぎ見ると、武器を捨てて礼拝しました。お釈迦さまは尋ねられました。

「王よ、水と人の命とどちらが大切か」

「水よりも人の命の方がはるかに大切でございます」

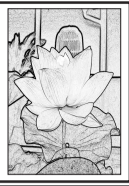
「その水のために大切な人の命を捨てるという事は、正しいことではない」

一同は黙つてしまいました。お釈迦さまはさらに言葉を続けておさとしになりました――

「汝たちはなぜこういうことをするのか。もし私がいなかったら今日この場で血の河が流されるところであった。汝たちのすることは間違つている。(中略) 恨みをいだくものなかにあつて、われわれは安らかに恨みなく生きてゆこう。恨みをいだく人人の中にあつて、われわれは恨みなく暮らそう」

お釈迦さまの教えを聞いてどちらの国も非を悟り、戦うのをやめたということです。

いつの時代でも、自分が正しい、自分さえよければいいというところが、争いを起こします。いまこそお釈迦さまの教えを思い出したいものです。



人と人とのつながりを大切に

本願寺派 勸学 林 智康

「人と人とのつながりを大切に」これは私の平成十年の年賀状冒頭の言葉です。現代において最も考慮すべきことは、「人と人とのつながり」、すなわち「人間関係」であろうと思います。

蓮如上人五百回遠忌法要を迎えるにあたって、「環境」と「家族」の問題が提示されました。初めの「環境問題」は、二十一世紀の人類の生存に大きな影響を及ぼすもので、環境庁は①地球の温暖化、②オゾン層破壊、③酸性雨、④森林の減少、⑤砂漠化、⑥生物多様性の減少、⑦海洋汚染、⑧有害廃棄物の越境移動、⑨途上国の公害など、九項目を出しています。どれをとり上げても、現代に生きる人間として避けて通

れない問題です。今や国を超え民族を超えて、人間のエゴイズム（利己主義）を捨て叡智を出し合って解決することが望まれます。昨年十二月に京都で開催された「地球温暖化防止会議」はまだ記憶に新しいところです。

また、後の「家族問題」は、核家族時代・少子化時代・長寿社会を迎え人間関係の希薄になった時代において、夫婦・親子・兄弟姉妹の家族関係の回復が急がれます。中学生による小学生殺傷事件をはじめ、一連の殺人・自殺・いじめ・暴力などの諸問題も、「いのち」の「もの」化への現象が根底にあります。そして、「家庭のない家族の時代」（小此木啓吾氏）と言われるなか、愛情の欠乏した名ばかりの家族ではなく、本来の家族をとりもどす方策が求められています。

「環境」と「家族」の問題は、私たちの「いのち」の上で深く結びついています。

そして、この「いのち」に対して、持ちつ持たれつの相依相関関係や尊厳性・平等性を説くのが、仏教の縁起の思想です。人間は、一人では生きられません。また、人間は人間の力だけでは生きられません。他の人間や、他の動植物・自然によつて生かされているのです。そのため、私たちは他者の存在を認め、共存・共生の考えを持つことが大切です。その上に念仏者は、阿弥陀さまを中心にした家族関係を築き、また環境問題にもできるところから取り組んでいきますように。

『仏の願い』（探究社）より引用
この本は西照寺書庫にあります

※蓮如上人五百回遠忌法要は、平成十年（一九九八年）三月から十一月にかけて、八ヶ月を十期に分け、合計百日の間厳修されました。また、京都で開催された「地球温暖化防止会議」とは、平成九年（一九九七年）十二月に開かれたものです。その二つから二十五年以上経つ今もまだ、解決できていない問題ばかりではないでしょうか。 住職